

日本の休耕田の実態とその活用

発表者：新潟産業大学文化経済学科 2年 小林 大祐・澤守 大成

指導教員：経済学部 金 光林教授

(1) 休耕田の活用から始めた野菜栽培

2017年4月より柏崎市堀町内会の要望を受け、同町内会の約8アールの休耕田を新潟産業大学の金ゼミナールが活用し、野菜栽培を開始しました。2017年度にはじゃがいも、さつまいもなど栽培品目が単純でしたが、2018年度からこれまで毎年数十種類の野菜とハーブを栽培しながら、休耕田を見事に菜園に変えました。

2019年度からこの菜園で収穫した野菜を柏崎市の夢の森公園のエコハウス内で無人販売し、2020年度からJA柏崎農産物直売所「愛菜館」にも出荷し、大学生グループによる野菜栽培の自立化を図っております。

(2) 休耕田を活用した自然農法の試み

柏崎市の堀地区の金ゼミの菜園の周辺でまた耕作が続けられない畑（約3アール）が出たので、2022年度から金ゼミがそこを自然農法の試験田として活用する予定です。

「不耕起（耕さない）、不施肥（肥料を与えない）、無農薬（農薬を使用しない）」を原則にその約3アールの畑でさつまいも、カボチャ、オクラ、ズッキーニなどを栽培し、自然農法を試み、農業と環境との調和を模索する予定です。

(3) 日本の休耕田の実態

日本全国の耕作放棄地は農林業センサスによると、1995年に244,314Haでしたが、2015年には424,090Haへと大幅に増加し、新潟県の耕作放棄地は1995年に6,066Haでしたが、2015年に10,560Haとこちらも大幅な増加傾向を見せています。

2015年4月に行われた農林水産省農村振興局調べ耕作放棄地に関する意向調査では、発生原因としては、以下の理由が挙げられています。

- 1位：高齢化・労働力不足
- 2位：土地持ち非農家の増加
- 3位：農産物価格の低迷

最も大きな要因は「高齢化・労働力不足」であり、農業の担い手が減少していることが、そのまま耕作放棄地の増加に繋がっていると言えます。

(4) 日本全国での耕作放棄地活用の事例

耕作放棄地は放置しておけば、いずれ荒廃農地となり、再生や改善が難しくなります。自然への還元も容易ではありません。

そこで各地で耕作放棄地の活用が試みられています。

主な活用の事例は次のようなものです。

- ・そば・なたね・大豆・マコモダケ・さつまいも・エゴマ・シソなど比較的に手間のかからない作物の栽培

- ・ゼンマイ・タラの芽・山ブキなどの山菜類の栽培
- ・放牧・養蜂など
- ・果樹・植林など
- ・地エネ作物の栽培など
- ・ひまわり・コスモスなど景観植物の栽培
- ・市民農園としての活用



【堀地区の休耕地、2017年4月】

(5) 柏崎市における耕作放棄地活用の事例

柏崎市高柳町では2005年に棚田の耕作放棄地解消を目的に〈門出棚田愛農会〉が設立され、耕作放棄地を整備し、棚田のオーナー制を設けて、耕作の維持に努めています。その努力によって門出の棚田の美しい景観が守られています。

『新潟日報』の報道によると、柏崎市の電気工事業の「ライフサポート」が一昨年から同市の荒浜でさつまいもを栽培し、そのさつまいもを使い、甘酒を開発したといます。

柏崎市でも耕作放棄地の活用がいろいろと試みられていることが分かります。



【堀地区の休耕地の耕作、2017年4月】

(6) 金ゼミの今後の耕作放棄地に対する取り組み

新潟産業大学の金ゼミナールは今年の春学期から柏崎市の堀地区で耕作放棄地を活用した野菜栽培を続ける一方、高柳町を耕作放棄地に対する取り組みのもう一つの場所として選び、高柳町内の耕作放棄地の実態を調査し、植林など活用方法を模索する予定です。

[新潟産業大学経済学部 金ゼミ 活動紹介 - YouTube](#)



【堀地区の金ゼミの菜園、2021年8月】